

史料の信頼性に対する古くからの批判と重なり合うところが多い。だとすれば、結局のところ、オーラル・ヒストリーの方法上の問題は厳密な意味での史料批判論へ帰着すると考えることもできるだろう。

以上のような、オーラル・ヒストリーと史料批判をめぐる諸問題を念頭におきながら、今大会シンポジウムでは、東南アジア史学におけるきわめて具体的で実践的な課題として、この問題を考えてみたい。東南アジア固有の地域的特性と史料状況を背景として、歴史学に限らず、政治学、社会学、人類学などを含めて多くの東南アジア研究者が、オーラル・ヒストリーを、全面的にせよ補助的にせよ、不可欠の史的方法として採用しつつあり、われわれは何よりもまず実践上の問題としてそれを捉えていくことが必要だからである。そして、欧米や日本の歴史学や社会学においては、すでに年輪を刻んできたと言っても良いこの問題に東南アジア史学の方法として今日の時点で取り組む意義も議論してみたい。

そこで、本シンポジウムでは、オーラル・ヒストリーをその史的研究のなかで積極的に実践しつつある3人の会員に、まず、それぞれが、なぜオーラル・ヒストリーという方法を用いるに至ったのか、それまでの当該分野の研究史を踏まえたとき、オーラル・ヒストリーが、どのような新たな領域を切り拓き、貢献をすると考えられるのかなどを、個々の研究とその領域における他の研究を紹介しつつ、具体的に指摘していただく。そのうえで、過去の再構築のためにオーラル・ヒストリーを利用する場合の史料批判上の諸問題、さらには歴史学の方法について、それぞれがどのような経験をしてきたか、どのような認識・態度をとるに至ったか、あるいはとらえているかを論じていただく。そして、シンポジウムの各報告と討論を通じて、オーラル・ヒストリーの実践上の諸問題さらには歴史学の認識と方法の問題にも迫ることを大いに期待したいと考えている。

口述史の可能性と諸問題ーインドネシア華人社会史研究のとは口から

貞好 康志(神戸大学)

報告者は元来、インドネシアの国民統合における「華人問題」の変遷を、政治史ないし政治思想史の観点から主に文献史料を用いて辿ってきた。5年ほど前から「華人社会」のあり方そのものに対象を定め、中部ジャワの町スマラン周辺で幾度かフィールドワークを行った。華人の居住・活動範囲が旧華人地区から空間的に拡散し、スハルト体制による「同化政策」も手伝って、華人コミュニティの姿が目に見えにくくなった現在、華人社会とその歴史に接近する重要な単位は個人や家族である。族譜を編むことさえ稀なジャワ華人の個人史・家族史ひいては社会史を再構成しようとするれば、オーラル・ヒストリー(=口述史)の手法に大きく頼らざるを得ない。口述史を主たる方法として華人社会史を書いた先例は少なくともインドネシアに関してはほとんどなく、報告者にとって、依然手探りの状態が続いている。今回はそうした模索の過程で認識するに至った、口述史の可能性と問題点を報告者なりに仮整理し、議論の材料に供したい。

口述史のポジティブな可能性としてしばしば指摘されるのは、①文献史料があまり対象とせず、自ら文字史料を残すことの少なかった庶民や女性などの生きた歴史を再構成する主材料になり得るということである。この点はカピタンなど旧支配層や近現代の財閥などに対象が偏ってきた華人研究についても当てはまる。また口述史料は、②文献史料で欠落したり見落とされがちな、現場の実態に迫る手がかりとして有用なことが多い。多面的な

「事実」、少なくとも当人たちにとっての「真実」に近づくため、文献史料と相互補完的に付き合わせることで、歴史叙述の緻密性や迫真性の向上につなげることが期待される。この点は、ある華人女性のライフヒストリーについての聴き取りの経験などから具体例を述べたい。このほか口述史は、③人々の世界観や歴史観をすくいあげる源泉として、また④歴史資料一般に対する観察眼や分析力を養う上でも有用と思われる。

口述史につきまとう陥穽として、⑤「事実」に迫ろうとした場合の、史料としての信頼度の問題がある。ある歴史的事象／それに対する語り手の当時の認識(誤認を含む)／現在の記憶(忘却を含む)／語り(沈黙を含む)との間にしばしばズレがあり、さらに聴き手との関係や聴く状況によって語りの揺れ動くことが少なくない。⑥語り手の生きてきた時代が20世紀、すなわち東南アジアにおいても教育やマスメディアの発展した時代だという点も無視できない。語り手が同時に「読む人」である状況が(少なくとも華人の場合)大半だということである。語られたことが、実は書かれた歴史のうろ覚えや焼き直しかもしれぬ可能性に注意を払う必要がある。このほか、⑦聴き取り・聴き書きの「モラル」をめぐる諸問題、⑧「時限」の問題(体験者本人からの聴き取りは50～60年前についてが限度か)なども重要だろうが、紙幅の都合上、大会での議論に委ねたい。

語りに「再現される過去」—南部フィリピン・サンギル人女性の紛争体験— 石井正子(日本学術振興会)

1960年代後半、フィリピンのミンダナオ島、スルー地方一帯では、モロ民族解放戦線(MNLF)を中心に、政府に対してムスリムの主権(後に自治権)を要求する武力闘争が展開された。とくに1960年代末から1980年代にかけて、MNLFとフィリピン国軍との戦闘は激しさを増し、これらの地域住民、とりわけムスリム系住民に対する殺戮、暴行、拉致、略奪、放火などが繰り返された。しかし、MNLFを中心とするムスリムの分離運動に関する従来の研究では、主に運動の担い手たちに焦点が当てられ、運動によってもたらされた状況のもとで受け身の変容を迫られた人々の問題は看過される傾向があった。

報告では、このような研究状況のなかで、紛争に巻き込まれた人々の「語り」を資料に紛争体験を考察する方法論がもつ可能性と問題点をとりあげたい。具体的な研究実践として報告者は、MNLFの活動からみれば周辺に位置していたサンギル人女性21名にインタビューを行い、彼女たちの「語り」を分析することをおこなった。フィリピンのイスラム教徒は10以上の民族集団で構成されるが、サンギル人はそのなかでも政治的、人口的にマイノリティである。

紛争によって突然日常生活を破壊された多くのムスリム系住民にとって、MNLFの武力紛争がもたらした紛争とは何であったのか。紛争は人々に自己と社会についてどのような認識の変化をもたらしたのであろうか。そして人々は、どのようにして生活を再建していったのであろうか。報告ではまず、フィリピン・ムスリムに関する先行研究を紹介しつつ、この研究課題に対してなぜ「語り」を資料に検討する方法が有効であるかについて述べる。

次に、「語り」の資料価値をめぐる問題点を指摘する。資料としての「語り」が、「客観性」や「実証性」に欠けるという従来からの問題は、ポストモダニストたちが提起した論考によって、さまざまに検討されてきた。ここでは、そうした系譜を踏まえた上で、報告者の研究実